第二三回 日韓シンポジウムに参加して

一般社団法人 北海道地域農業研究所 専任研究員 申 錬 鐵
北海道大学 農学院修士課程 長 島 朋 美

二〇一六年八月三〇日～三一日の二日間にわたり、中国吉林省長春市において、第二三回日韓シンポジウム兼第一〇回東アジア国際農業シンポジウムが開催されました。日本・韓国・中国の農業経済学の研究者と大学院生が参加する今回のシンポジウムには、三ヵ国合わせて六〇名以上が参加しました。日本からの参加者は六名でありますが、そのうち、当研究所からは私が参加いたしました。

日韓シンポジウムは北海道農業研究会が一九九三年に実施した韓国江原道の農村調査が契機となります。この調査の準備と実施において、北海道と韓国の江原道の農業経済学研究者間の交流が深まり、その貴重な交流経験を生かすかたちとして日韓シンポジウムがはじまったのであります。日韓シンポジウムは、一九九四年から北海道と韓国の江原道で隔年開催されており、北海道と韓国の江原道の農業経済学研究者がお互いの学術交流の強化と情報交換を図っています。二〇〇七年から中国の農業経済学研究者が参加することで、日韓シンポジウムは東アジア国際農業シンポジウムと併催することとなり、農業部門に関するより幅広い議論ができるようになりました。さらに、二〇一三年には二〇回目を迎える日韓シンポジウムを記念して、日韓シンポジウムに参加している日本と韓国の研究者が当研究所の助成を受け『日韓地域農業論への接近』を出版しました。日韓シンポジウムについて興味のある方はそちらをお読みください。

日韓シンポジウムの初めての中国開催地となった長春市は、中国吉林省の省都であり、自動車産業が発達している人

（谷本一志団長の挨拶）

（開会式の様子）

（施設見学）

口約六〇〇万人の大規模都市であります。農業からみると、長春市は中国の食料生産基地と言われる東北三省で生産された農産物が集まる地域であり、中国東北部における農産物流通の拠点と農産物消費地として位置づけられており、農業への関心が非常に高い地域であります。

今年の日韓シンポジウムのテーマは「現代農業の発展経路と農政」であります。例年のシンポジウムはある地域を対象としてその地域における農業・農村問題、つまり、地域農業をメインとしてきましたが、今回は議論の地域的範囲を国全体に拡大し、各国の農業・農村・農政に係る問題を東アジアという一つの地域に広げて知見を共有し、更なる農業の発展・持続性に寄与することが目的でした。

今回のシンポジウムでは学術報告一〇編、若手研究者発表六編、計一六編の報告がありました。各国の報告内容に簡単に触れてみると、日本の研究者からは北海道の限界集落からみた農村社会についての今後の展望とＨＡＣＣＰに関する課題と地域の対応について報告されました。中国の研究者からは、農産物の電子商取引・農産物生産効率性・牛肉等級制に関する消費者行動に関する分析結果が報告されました。韓国の研究者からは酪農経営における天然資源の活用、中国における農家の組織化に係る農業者の意識についての分析結果が報告されました。その他に大学院生セッションが設けられ、大学院生間の主題発表と活発な議論、意見交換が行われました。

この二三年間、日韓シンポジウムを通じて、日本・韓国、さらに中国の三ヵ国の研究者は研究成果を共有してきました。このような研究成果の共有は、各国の研究者が直面する自国の農業問題や東アジアの農業情勢を多様な視点から把握する上で大きな役割を果たしてきたと思います。さらに、各国に存在する農業問題の今後の方向性と対策を講じていく上でも非常に重要な意味があると思いますので、より深い議論や研究成果の発信が求められていると考えています。

今年で二三回を数える日韓シンポジウムがこれまでの成果を踏まえて、継続して実施していくためには、三ヵ国の研究者、特に若手研究者間の意識共有と交流活動が非常に重要であることを、第二三回日韓シンポジウム・第一〇回東アジア国際農業シンポジウムに参加して強く感じました。